

1. アブラハム

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」

— 創世記 15 : 1~6

東北の秋は足早である。紅葉が始まったと思う間もなく、木枯らしに舞う枯葉の姿が早くも目に浮かぶ。この夏から秋にかけて、様々な出来事が身边を激しく波立たせた。相次ぐ自然災害や国際紛争、とりわけ北朝鮮の核実験や繰り返して行われた弾道ミサイル発射実験を巡る緊張は一触即発の危機的な状況を生み出している。核保有国が所有する核弾頭の総量は 1600 発、地球を 7 回破壊するほどの威力だとも言われる。核のボタンが一人の権力者の手に委ねられているということも、考えてみれば恐ろしい話だ。人類は今、危機存亡の瀬戸際に立たされている。そのような大状況だけではなく、身边も多事多端（多難？）である。人は何処から来て何処に行くのか、存在の根底を問い正されるような状況や出来事は枚挙に暇がなく、思い煩いに身を焼かれるような経験から本当に解放されるのは 85 歳を数えるようになっても至難なことだと痛感させられている。若い頃とはまた違った面で、使徒パウロの「噫 われ悩める人なるかな」（ローマ 7 : 24。文語訳）という慨嘆がわが事のように迫ってくる。

そのわたしにいつも大きな安らぎと希望を与えてくれるのが、標記の御言葉である。信仰の父と称えられるアブラハム（創世記 11 : 26 から 17 : 3 まではアブラムと呼ばれており、改名の意味は 17 : 5 に述べられている。ここでは便宜上、アブラハムと呼称する）が、「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」（創世記 12 : 1）という主なる神の御声に従い、妻のサライや甥のロトを伴ってハランを旅立だったのは 75 歳の時だった（同 12 : 4）。神はアブラハムに繰り返して、彼とその子孫を祝福し、彼を地上の氏族の祝福の源とすることを約束しておられる。しかし、神の祝福は、今日のわたしたちにおいてもそうだが、所謂、無事平穩、無病息災、家業繁栄等の現実的、人間的な幸せを意味するものではなかった。むしろ、旅立ったアブラハムを待ち受けていたのは試練の連続だった。遊牧民族の常だとも思うが、創世記 12 章から 25 章前半に至るアブラハムの生涯は苦難に満ち、苦悩に彩られた旅の連続にほかならなかった。彼は、エジプトにも足を延ばしている。美貌の妻ゆえに危害が加えられることを恐れて妹と偽り、ファラオの王宮での波乱を生じさせたことや、ロトとの別れと救出等々、彼の失敗も含めて、アブラハム物語は極めて人間的な色彩に満ちている。それにしても、彼の恐らく最大の苦悩あるいは疑惑は、神の約束と彼の現実との乖離ではなかったか。「あなたの子孫を祝福する」という神の約束にもかかわらず、夫婦ともに高齢に達していたが、跡を継ぐべき子は未だいなかった。血筋が絶えるということは、現代は措くとしても、古代から

洋の東西を問わず、最大の不幸とされてきたことは確かだ。旧約の世界も例外ではなく、15章のアブラハムに対する神の再度の祝福の約束にもかかわらず、歳老いて子がないサライはエジプト人の女奴隷ハガルを側女^{そばめ}とするようにアブラハムに勧め、両者の間にイシュマエルが生まれるが、彼は家督を継ぐ者ではなく、選民イスラエルの枠外に置かれることになる。人類史上繰り返され、今日一層激化している民族抗争の背景に、誤った選民意識が介在していることは確かだ。しかし、神はアブラハムに「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」（創世記 12：3）と約束しておられる。偏狭なナショナリズムや排他的な民族主義は聖書の信仰とは無縁であるはずだ。

ともあれ、正妻であるサライに子がないことはアブラハムにとっては単に寂しいとか、所在なさというのを越えて、神の約束を信じて旅立ったにもかかわらず、不安や懐疑を抱かせずにはおれなかった。わたしたちも神を信じると言いながら、思うに任せぬ出来事に慌てふためき、御心^{みこころ}を計りかねて悶々とするようなことは少なくない。神はそのようなアブラハムを天幕の外に連れ出して、彼の嫡子^{ちやくし}が彼の跡を継ぐと語り、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」（創世記 15：5）と言われた。創世記の記者は「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（同 15：6）と簡潔に、しかし力強く記している。

天文学や星座の研究などとは全く無縁に過ごしてきたわたしだが、夜空を眺めることは好きだった。昔は星空がとても美しく、手に取るができるような星の輝きに見とれて、時間を忘れるようなことが少なくなかった。虚飾に彩られた都会の夜は、わたしたちの生活から星の輝きを奪ってしまい、星に寄せた夢やロマンを口にするのもすっかり影を潜めてしまった感がある。他方では、高度の科学技術の発展で、宇宙の神秘が次々に明らかにされている。そのような中で、聖書の創造物語や族長の旅などを一笑に付すような風潮も広がっている。しかし、科学の進歩と聖書の物語は相容れないものなのか。むしろ、科学が解明していく世界が広がれば広がるだけ、わたしは「(満天の) 星を数えることができるなら、数えてみなさい」とアブラハムに語りかけられた主なる神の御言葉の衝迫^{しょうはく}を実感させられる。

昨今の天文学はわたしたちが目にする事ができる銀河系宇宙だけでなく、無数の銀河系があることを明らかにしている。わたしたちが夜空に仰ぐ無数の星の光も、光の速度から計算して、何万年もの前のそれを見ていることが少なくないようだ。太陽系惑星はお馴染みだが、他の惑星を従えた無数の恒星の存在も次々に発見されている。わたしたちの目には一瞬の光芒^{こうぼう}のように見えても、星の光は無限とも言うべき深さを湛えて夜空に輝いている。聖書は「はじめに 神は天と地とを創造された」（創世記 1：1。口語訳）という言葉で始まっているが、この「天」とは、わたしたちが認識できる世界だけではない。悠久^{ゆうきゅう}の光を湛えた大空、わたしたちの想像をはるかに超えた宇宙も神の御手^{みて}のわざなのだ。信仰の詩人は「あなたの栄光は天の上であり、みどりごと、ちのみごとの口によって、ほめたたえられています」（詩篇 8：1～2。口語訳）と神を讃え、「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか」（同 8：4）と謳^{うた}う。

夜空を仰ぐことで、わたしも神の御手のわざを思い、わが身の卑小さを思い知らされると同時に、

だからこそ無限の愛をこめた神の^{ふところ}懐に身を投げかける思いで一切の苦悩から無条件で解放され、新たな一歩を踏み出す勇気をいただいた覚えが少なからずある。

アブラハムの旅は、それからも続く。17章では、99歳になったアブラハムに嫡子の誕生が知らされる。主なる神の祝福の言葉と同時に、彼はアブラムからアブラハムへと改名するように告げられる。「多くの国民の父となる」ことを主は再度、約束された（創世記 17:4~6）。また、妻サライはサラと呼ぶように、新しく生まれる子にはイサク（彼は笑う）と名付けるようにと言われる。人が生きることは、表面の姿・形、あるいは喜怒哀楽が如何にもあれ、基本的には主なる神の豊かな^{おん}御顧みの中で「笑い=喜び」としてあることを、聖書はわたしたちに語りかけているのだ。

間もなく、主イエスの誕生を祝うクリスマスを迎える。苦難に満ちたご生涯、しかも十字架にかけられた方の誕生を何故、世界中が挙げて祝うのか。イサクの誕生も決して前途洋々たるものとは言えない、苦悩に彩られた面を持っている。次回では、イサク物語から、ことにイサクと名付けられたことの意味を尋ねてみたい。